けても、その真の深い含蓄を学び味うことの余りにも遅きに失したことよ。

稿を終えるに当り、改めて偉大な人生の先達、橋田邦彦先生の御冥福を心よりお祈りする次第である。また、未だお目に掛かり御挨拶する機会に恵まれぬが、藤本氏、那波先輩に厚く御礼申し上げる。

『玉碗記』——その後と今

岸井　貫

（昭和二十二年理甲）

奈良東大寺の正倉院に「白瑠璃碗」が収蔵されている。これは淡く褐色を帯びた透明ガラスの碗で、外面に円形および六角形カット加工を規則正しく施されたものである。

正倉院の御物は昭和二十一年以来毎年展観されており、多くの人が特にガラス器に関心を持つという（一）。一般には御物は我が国へ渡来して聖武天皇・光明皇后の宮中で愛用され、天皇崩御の四十九日忌に皇后が天皇の後生を弔われるために、遺愛の品々を東大寺へ納めたものと考えられた。これらは盛唐の工芸品が直接あるいは朝鮮を経由して将来されたもので、デザインの面では中国だけでなく遥かの西域のそれをも反映すると見られた。従って御物は現代の人々の関心を大仏開眼の盛儀を持った天平の昔と、玄宗・楊貴妃の長安の盛時、シルクロード、西域へと向けさせた。

江戸時代享保（一七二〇前後）の頃、安閑天皇陵（羽曳野市。地名から高屋丘陵という表現もある）が大雨で損じた折りに白瑠璃碗が見つかった。碗は里の長（おさ）の家で長く保管された後に、近くの西琳寺へ納められ伝えられ、ついで明治維新の廃仏毀釈の世相の中に失われた。

その後八十年、昭和二十五年に名刹西琳寺についての講演会が開かれた折りに白瑠璃碗が会場へ持参、披露された。この碗は保管の状況やいきさつ、古記録との照合結果など

から、安閑陵出土の品に間違いないと鑑定された（二―四）。

次にこれを正倉院蔵の碗と並べて較べる試みがあった。その結果、二つは寸法もカットの数・配列もそっくり同じ、僅かにカットの深さの差により凹部が円形または六角形になる割合に違いがあるだけであった。

二つの碗が殆ど同形であったことは学問上の論争を引き起こした。二つは同一工房で同時期に（ことによれば同一工人により）作られたであろうし、このように珍しいもの（東アジアには他の出土例が無い）が二つあるならば、伝来も二つ一組で一緒だったであろう。これらがそれぞれ違う時代（六世紀前半と八世紀中葉）に埋蔵と収蔵されたのは何故か、であり、もう一つは何時、何処で作られたのか、であった（四、五）。

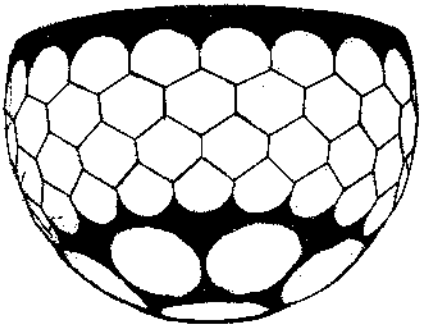
一つの説は天平に近い時期に中国で製作されて日本に渡来し、一方が安閑陵に追埋蔵されたと考え、他はペルシャ・ササン朝（七世紀中頃に終わる）の工房のガラス工芸品と推定するものであった。

これらはそれぞれ弱点があった。前者では中国・朝鮮に類品が無いこと、後者では肝心のペルシャでの出土が無いこと（実際には昭和十年代に一個の出土例があった。西アジアではかなりの出土例がある。当時世界での出土状況が十分には知られていなかったことを考慮する必要がある）である。

井上靖氏の小説『玉碗記』は昭和二十六年に発表された。美術担当の新聞記者である主人公が歴史学者の友人とともに新発見の玉碗を見、また二つの碗の比較に立ち会う経過を端緒とし、『日本書記』にある安閑天皇と妃との相聞歌と死別、相聞歌について主人公に語った義弟夫婦とその死別の悲しみ、村外れに静かに寄り添い鎮まる天皇陵と妃の陵、をたがいにからませて、読者を沈鬱な気持ちに誘い込む。さらに友人には、二つの玉碗がペルシャで作られてから一緒にシルクロードの流沙を越えて渡来し、安閑天皇と妃に愛用されてから、一つは天皇の崩御で御陵に副葬され、他は数奇な運命を経ながらも聖武天皇の宮中へ入り、永く相別れた後に図らずも昭和の時代に相逢った、という想像を語らせている。

安閑陵出土の玉碗は現在東京国立博物館に常設展示されている。肉の厚いガラス碗に彫られたカットは一つ一つが凹レンズの役目を

正倉院蔵玉碗のカット配列を示す模式図
（高さ8.5cm、直径12cm）
一段当たりカット数は上から
18－18－18－18－7－1（底面）



栄螺殻状突起文ガラス碗

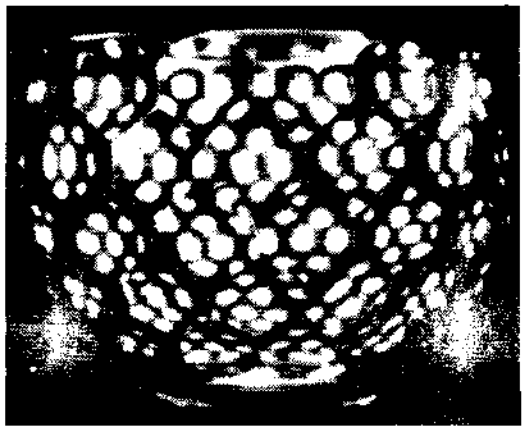
して、灯をすかして見ると凹レンズ群を凹レンズ群を通して見る形になり、大変きらびやかである。葡萄色の酒を満たしたらどんなに美しいかと想像してしまう。複雑な加工具なしで作ることができ、意外な効果を出すスマートなデザインで、現在でもよく使われている。ただし細工の手際・熟練が必要なのは言うまでもない。たとえばカットの配列の正しさやそのエッジの鋭さなど。

昭和三十四年に東大イラン・イラク調査隊の深井晋司教授（昭十九文甲、故人）はテヘランの骨董店で陶器様の外見を示す碗を見出された。これは表面を厚い風化層でおおわれたガラス器であったが、院蔵の碗と同形（カット数が院蔵品の八十に対して七十八と僅か違う）であることをすぐに見てとられ、興奮を押し隠して購入された（四）。

これは玉碗のペルシャ起源説の裏付けになると思われたので、翌年には学術的な発掘で出土を確認することが試みられた。「出土地」とされた地域各所での発掘試行の末、栄螺殻状突起装飾文ガラス碗を得たが、院蔵品の類品はついに得られなかった（四）。

後に知られた所では、この時期にはガラス器を含め形象土器や金属器などの多数の遺物がテヘランの市場に出回り、集散地の名によって「アムラシュの遺宝」と呼ばれた。ガラス器は院蔵品類品が推定三百ないし四百、他種類の円形カット品や円輪貼り付け型加飾ガラス器を含めて約千点、日本へ将来されたものでも数十点と推定されている（六）。深井教授も数点を購入することができた。同教授にはこの

玉碗模製品に水を入れて電灯を眺めた状況。
碗は由水常雄氏（東京ガラス工芸研究所長）作



ガラス器に関連して『玉碗記』に触れた文章がある（七）。

実際に現在では玉碗類品あるいはこれと栄螺殻状突起装飾文碗との組合せを展示する博物館は、東京国立博物館、岡山市立オリエント博物館、池袋サンシャイン・シティ内オリエント博物館などいくつかある。昭和五十三年には東博で安閑陵出土品とペルシャ出土院蔵類品・突起文ガラス器などを多数集めた展覧が催された（「秘宝」を含む）。

アムラシュの遺宝の出回りは数年で終わり、詳しい学術的調査はできなかったが、この事情は一九三〇年代のルリスタン青銅器群と同様である。しかし他方ではそれまで資料の少なかったササン朝ガラスの実態がやや明らかになったとも言われる。日本で出土したガラス器またはガラス器破片で類品が「遺宝」中に見出されたものは、玉碗を含め少なくとも三種類ある。平成四年十月には横浜美術館で、コーニング・ガラス美術館所蔵の二つのササン朝ガラス器が展観された。一つはアムラシュの遺宝でかつ日本出土品の類品であった。

しばらくして、院蔵のガラス器が聖武天皇の「遺愛」の品ではないという考えが提出された。深井教授自身「……記録は無いが……東大寺の大仏開眼会の際に納入されたものと推定される……」と記されたが、早くに明確に主張されたのは由水常雄氏である（八）。その論点は、現存ガラス器の一個は大仏開眼会に使用されたのが確実であるが、天皇崩御時の納入品のリストにはガラス器が全く無いこと、その後の現存ガラス器の初出が治安元年（一〇二一年、一個）、建久四年（一一九三年）と元禄六年（一六九三年）に大量の新しい数え上げがあり、白瑠璃碗の初出が元禄六年であること、である。建久・元禄の二つの時期がともに大仏開眼会と関係するとも指摘された。

最近ではこれに近い見解を述べられる例が他にも見られるようになった。例記すれば

「正倉院に入るまで一体どういう形で伝えられてきたのかもよくわからないが……もとは東大寺の寺宝であった」（九）。

「正倉院に……六点のガラス器は、どこでつくられ、どういう経路で……入ったのかよくわからない宝物である……」（十）。

平成二年に再び白瑠璃碗類品を含むペルシャ出土品多数（「秘宝」を含む）が相逢って展観される機会があった。深井教授の発見の時に同行されていた伊藤正徳氏（当時駐テヘラン日本大使館）が町田市に在住しておられる縁か、同市立博物館で「オリエントのガラス――ペルシャ出土のガラスを中心に――」展が開かれた。その図録には同氏の回想文が寄せられている。「……土器などをごそごそいじっていた深井さんに息を殺した声で呼ばれた。……真っ黒なコップ状の器を手にしている。なんとこれが……院蔵白瑠

璃碗手のカットガラス器の第一号……」（一八）。

同氏はまたテヘランでの発見の後、調査隊帰国の前に一部の隊員達とアムラシュを経て出土地（ギーラーン州デーラマン高原益地地方）を訪ね、発掘した地主とも会って聞き取り調査をした時のことを記しておられる。車、騾馬、徒歩の旅を重ねて全九日を要した。現地は農耕を営む村々で、開かれた墳墓と散乱する人骨・土器が数多く目撃された。

当時テヘランに出回った碗の形、カットの数・配列を丹念に記録したものも図録に記されている。カットの段数（底を含んで三ないし六）も一段当たりのカット数（底は一、他は五ないし十九）も多様である。このように図録は深井教授の文章では触れられていない調査隊や周囲の事情を明らかにしており、興味深い。

深井教授の蔵品についての化学分析の結果が報告されている。板ガラスや瓶ガラスと似ているが、ソーダ分は多め、耐水性を与えるアルミナが少ないので、表面の風化が著しかったのであろう。これは古代ガラスでは普通のことである。院蔵品が大変丁寧に扱われ伝世して来たことがわかる。

安閑天皇陵は大阪府の東辺、二上山西麓の羽曳野市にある。いわゆる古市古墳群（または誉田白鳥古墳群とも）に属し、仁徳天皇陵の属する堺百舌鳥古墳群とはひと続きであるが、電車では堺―古市間は相当な遠回りになる。駅前の狭い道路に細かく書き込まれた案内図があったので、頭に入れて歩き出した。冬の朝で県境の山並の影響か雪がときどきちらちらしていた。

踏切の角に「聖徳太子霊場第四番・河内飛鳥古寺第七番西琳寺　四〇〇m」の立看板の案内が東を指している。駅

安閑天皇陵

前の商店街を西へ過ぎて国道百七十号線（東側の路線）に出ると右左にいくつもの古墳の頭が見える。南へ歩くと近鉄の車両基地を陸橋で越え、さらに行くと安閑天皇陵の前へ出た。国道を車・トラックが通るので『玉碗記』に書かれた時代のような静かな雰囲気ではない。周濠の水はことによれば昔は農業用水の役目を持って庄屋の家柄が管理していたかも知れないと考えた。御陵の植え込みに薄く雪が積んでいた。皇后陵は百メートルか二百メートル位離れた所に、住宅に囲まれながらも長閑に鎮まっていた。また次代の宣化天皇に始まるという社伝をもち、安閑天皇を祭神とする式内社高屋神社が近所にあった。

駅前へ戻り東へ西琳寺へ向かう。この道はやがて国道百五十六号に会い二上山を越え当麻を経て飛鳥へ通ずる。石川を渡る地点まで来て、「昔水運の要地であった。」という説明札を読んだが、これでは行き過ぎてしまっている。「要地」とは金剛・生駒の山脈を横切って西へ向かう大和川と合流点に近いということであろう。石川の上流は「王陵の谷」と称される陵墓の多い地域を経て、千早・赤阪へ行き着く。古市は鉄道交通の要地とも言える。

喫茶店で休んで道を聞いた。「村のまんなか」にある、戻って「代官屋敷」の所を右へ行け、とのこと。この辺からは安閑陵が見通せる。一キロメートルくらいか。空が晴れてきた。注意して歩くと、船の木材を一部に利用した屋敷と説明札とが見つかった。

寺は門の内側に木の色の新しい建物が三つ四つあるたたずまいで、塔礎石と「西琳寺跡　大正八年　大阪府」と刻んだ石碑が保存されている。文首根麻呂によって建てられ、奥の院が高屋丘あったという札がある。奥の院は安閑陵に

西琳寺境内

近くて、玉碗がここに保存されたゆかりであったのだろうか。近くは住宅や商店が続く普通の街並みであった。文氏は朝鮮から学問を伝えた王仁に始まり、東は文氏、西は文首となったという。時代も下れば総ての氏人が学者ということでもなく、そのガラス製骨蔵器（奈良県榛原町出土）を国宝として東京国立博物館に残す文祢麻呂は壬申の乱に吉野方（天武天皇方）の将軍として働いた。

前記のように考古学的調査が十分でないので、玉碗の工房跡は確認されていない。一つの推定は王都クテシフォン（現イラク内）近くで四ないし六世紀に作られたというのであるが、地中海沿岸でローマ期に作られたとの考えもある。

このような事情が知られ、また世界での出土状況が詳しく解るようになると、昔の想定には異論を出せるかもしれない。類品が多数ペルシャで見出され、また西アジアからヨーロッパにかけても出土例があるとすれば、二つの玉碗が違う時期に違う用途で日本へ渡来した確率が出てくる。一つは仏具として大仏の再建開眼供養会に使われた後に院蔵になったとも言えよう。中国に関して言えば、軟玉・硬玉があったためにガラス器が珍重されることはなく、そのために多く使用されたにも拘らず出土遺物が極端に少ないことが注意されている（十一）。

『玉碗記』から四十余年を経て振り返ると、これは井上氏の美術記者としての経験・見聞・見識と当時の学会の論争とを取り入れ、さらにはその後の経過も含めて先取りしており、これらを素材として芸術的に昇華させた作品であったと感ずる。

安閑陵は天皇・皇后・皇妹合葬陵であるとの見方がある。陵墓が単一葬祭用の形式から追葬可能形式に遷る時期のものであり、古墳の形式に基づく編年と実年代とを結びつけるための資料として、考古学的にも重要であったという（十二）。

近くの誉田八幡宮の説明札によれば、この地の領主畠山氏には内紛が多く、応仁の乱の一因であったが、乱後においても、時には足利将軍も介入して戦闘が度々行われ、古墳が砦として使われたという。安閑陵もその例に漏れなかった。

参考、引用文献

（一）杉山二郎『東洋古代ガラス――東西交渉史の視点から――』東京国立博物館（昭五五）

（二）井上暁子『ガラスのはなし』技報堂出版（昭六三）

（三）井上靖『玉碗記』

（四）野田裕『幻の瑠璃碗を求めて――秘境デーラマン発掘行』東京新聞出版局（昭五六）

（五）深井晋司『ペルシャのガラス』東京新聞出版局（昭

五八）

（六）伊藤正徳『白瑠璃碗のふる里を求めて　オリエントのガラス――ペルシャ出土のガラスを中心に――』町田市立博物館（平成二）

（七）文献（五）に収録　第二「玉碗記」（昭四一）

（八）出水常雄『ガラスの道』徳間書店（昭和四八）

（九）東野治之『正倉院』岩波新書（昭和六三）

（十）山崎一雄「遺物はどこでつくられたか――化学成分を中心に――」（馬淵久夫、富永健編『考古学のための化学一〇章』東京大学出版会、昭五六）

（十一）杉山二郎『オリエント考古美術史――中東文化と日本』NHKブックス（昭五六）

（十二）小林行雄『古墳の話』岩波新書（昭三九）

向陵（駒場）元一高寄宿寮再訪記

辻　幸一

（昭和二十四年文甲）

先の同窓会報に、我々が多感な青春の一時期を過した駒場の元一高寄宿寮が、近く取り壊されるという記事があった。

私は、昭和二十四年の卒業ではあるが、入学は昭和二十年の理甲一組で、戦後文転したため都合四年間の戦中戦後の混乱期の青春時代を、この寄宿寮で過しているので、此の記事は誠に感慨深いものがあった。

一高卒業以来四十有四年、我々の母校は今や既に亡く、一部の校舎は今後も尚暫くは残り続けるにしても、寄宿寮の建物そのものが近くなくなる事になるという。

卒業以来、一度も訪れた事の無い元一高の寄宿寮や校舎は、一体どのような有様になっているのか、もう一度取り壊される前に此の目で見ておきたいと無性に思ったので、卒業時の同級生であり今でも常時往来のある相川源男、坂本雄之助・正田泰央の三君に声を掛けたところ、三君共二つ返事で同意されたので、某月某日、時折り小雨のそぼ降る生憎の天気ではあったが、坂本・正田両夫人も交え（相